

献 辞

## 川瀬謙一郎先生のご退職にあたって

立 川 明

川瀬謙一郎先生は、東京大学文学部倫理学科を卒業された後、1956年、当時故小島軍造教授の下で推進されていた「民主主義教育の哲学的基礎づけ」に参画され、それ以来今日までICUに在職された。ご本人が時折述べられる如く、教育学科と大学院教育学研究科に所属されながら、自らは教育学の正規の訓練は受けられていない。そのことを多少とも気にされている。しかし、戦前の教育学と倫理学の関連は一先ず置き、社会哲学の学徒としての川瀬先生が教育学を担当されたのは、大きくは戦後教育改革の方向に、また小状況としてはICUの設立の趣意にも、叶っていたのではないか。周知のように、戦後教育改革を主導した教育刷新委員会（その委員の何人かはICU創設の支持者でもあった）は、大勢としては戦前の師範学校を厳しく批判して、教員養成におけるアカデミックかつ民主的な訓練の必要を強調した。教育基本法はこうした立場の宣言であったが、「民主主義教育の哲学的基礎づけ」の課題は、この法律の体系的な「基礎づけ」にあった。「民主主義教育の哲学的基礎づけ」を改めて読みかえすと、その第一部「民主主義の精神」には、社会哲学の道具を用いて西欧近代の社会の特色と民主主義の変質を分析する箇所があり、若き日の川瀬先生の学問的な情熱に出会う思いがする。この研究報告は洛陽の紙価を高めた訳ではない。しかし、今日にも残るその意義の一つは、教育者・教育研究者と、他分野の者とが、戦後の民主教育の基礎に関して、ねばり強い意見交換・検討を重ねた点にある。こうした特色への川瀬先生の貢献は大きかったのではないかと想像する。

学部でも大学院でも、川瀬先生の社会哲学への関心は、特にマックス・ウェーバーの社会思想の検討となって表れた。1971年、大学紛争直後の大学院のコースで、数人の学生を相手に、ウェーバーの『儒教と道教』を講じられたのを、筆者は今でもはっきりと記憶している。正直の所当時の筆者には、ウェーバーの社会科学上の概念枠、例えば、ゲマインデやキルヘが教育学とどう関係しているのか、疑念がなくもなかった。というのも、ガスとミルズが編集したFrom Max Weberの序文で、ウェーバーの教育への関心(期待)はほぼ皆無である、との主張を読んでいたからである。川瀬先生は、ある社会に現れる人間理想の典型と、人間形成、そしてその社会の発展・停滞の関係を探る、という広いアプローチを採用された。20年後に振り返ると、こうした方法は、一般史との再統合を目指す教育史にも大きな示唆を含んでいたことを痛感する。ご健康の問題もあり、ご自身この主題をこれまで十分に展開はされなかったが、今後とも是非、研究・指導をお願いしたい分野である。

川瀬先生はウェーバーに加え、経済史の大塚久雄、宗教社会学のロバート・ベラー、実存哲学者のカール・ヤスバース等に傾倒されていた。先生の話の伺ううちに、こうした人々の著作を読みたいと思い始めた学生は多かったであろう。筆者も大塚久雄著作集を留学先にまで持ち運び、頭が疲れたときには取り出して繰り返し読んだ。また、主に日本語訳・英訳を通してではあるが、専門外のウェーバーもヤスバースもその著作の殆どを読んだ。そうした著作の魅力もさることながら、川瀬先生の直接・間接の薦めは大きかった。文化遺産の次の世代への伝達という点で、先生は真によき師であると思う。

川瀬先生のもう一つの関心領域は、(これは教育学に近い)西洋の大学論であった。先生はヤスバースの『大学の理念』、中でもそのコミュニケーションの議論を好まれ、1970年、大学が紛争の渦中、セミナーのテキストに用いられた。その折り、ヤスバースがバーゼル大学の創立記念日に行った講演を、クラスの為にわざわざ翻訳して下さり、それを謄写版刷りにしてセミナーの仲間に配った思い出がある。後には、筆者のクラスでフンボルトの大学論を講義して下さったこともある。考えてみると、ラシュドールの『大学の

起源』やシェルスキーの『大学の孤独と自由』を知ったのも、川瀬先生を通してである。

このように学生を自然に先学の世界に導く教育者ではあったが、しかし先生は学生に媚びることを嫌った。これも大学紛争の折り、本館の掲示板に、近代の合理化の意味を論じたウェーバーからの一節を、黙々と貼られたのも先生であった。力と「論理」の支配した当時、そうした内容に耳を傾ける者は少なかった。しかし、その後の歴史の推移を直視するなら、引用の内容が妥当であったことを、認めざるを得ないであろう。川瀬先生はまた、学生の答案の評定にも一貫して厳しかった。あるとき、学部学生の教育哲学のレポートの採点中の先生から、一応は納得のゆく内容にはCを与える旨の話を伺った。教師は一般に若いときには評点が辛く、年をとるにつれて「甘く」なってゆくという。この点、川瀬先生は例外のようである。

退職後のご健康とお好きな研究との進捗とをお祈りし、他方、私どもには相変わらずの厳しい評点を下さるようお願い申し上げます、先生への感謝の言葉に代えさせていただきます。